

讓原昌子の青春と文学

—— 朔北の植民地「樺太」に生きて ——

格 清 久美子

はじめに

讓原昌子(一九一〇—一九四八年)は、『北海道文学史』、文学事典等に名前を止める以外、今日一般にはほとんど知られていない。しかし、樺太(現サハリン)では、公立小学校の有能な訓導として奉職する傍ら、同人誌に短歌を発表して注目され、製紙工場の造材飯場で働く移民一家を描いた小説「闘い」(一九三六年二月、一九三七年二月)によって文壇にデビュー、「隠亡」の密やかな生活をリアルに描いた「金齒」(一九三八年六月)で第一次「九鬼賞」を受賞するなど、その将来が期待された。一方、『文芸首都』にも詩や小品を投稿し、林芙美子、萩原朔太郎、広津和郎等に認められるとともに、「闘い」第一章を再構成した「朔北の闘い」(一九三九年二月)は芥川賞候補作として宇野浩二の推薦を受け、樺太文壇に衝撃を与えた。また、一九四一年五月、母親の死を機

に教職を辞して上京し、本格的な創作活動に入った後は、「抒情歌」(一九四一年三月)、「故郷の岸」(一九四三年一、二月)が芥川賞候補作に、「泉」(同年六月)が樋口一葉賞候補作に上がり、戦後は「死なない蛸」(一九四七年二月)によって新日本文学会新人コンクールに入賞を果たすなど、一時期は中央の文壇でも注目された作家である。文学史的に見れば、これは、宮内寒弥の「中央高地」(一九三八年七月)、長見義三の「姫樽」(一九三九年六月、芥川賞候補)、寒川光太郎の「密漁者」(同年七月、芥川賞受賞)、および辻村もと子の「馬追原野」(一九四四年六月、樋口一葉賞受賞)等の北方文学が注目された時期と重なっている。しかし、讓原昌子は、東京における生活苦から肺結核に犯され、その後活躍する間もなく三七歳の若さで没した。

生前、著作集『朔北の闘い』(笠書房、一九四六年一月)が出版されたが、表題作の他に「抒情歌」が収録

されたのみで、『樺太』や『文芸首都』および同人誌に投稿した多数の作品は長い間人の眼にふれることもなく忘れ去られてきた。これらの作品が知人等の努力によって発掘され、『故郷の岸』（同成社、一九八五年三月）、『朔北の闘い』（同、同年一月）、『闘い・女の宿』（同、一九八八年十二月）の作品集として刊行されたのは、没後三六年を経た後のことである。しかし、この作家に関するまとまった論考はまだ少なく、譲原昌子を始めて一般に紹介した木原直彦『北海道文学史』戦後編（北海道新聞社、一九八二年四月）、荒沢勝太郎『樺太文学史』第四卷（艸人舎、一九八七年七月）、木原『樺太文学の旅』上巻（共同文化社、一九九四年一〇月）所収の各論の他に、個別の評論では右遠俊郎「譲原昌子小論」（『民主文学』一九九五年二、三、五月）および浜練太郎「譲原昌子と樺太」（『北海道民主文学』一九九八年一〇月）等がわずかに先行研究として挙げられる。このうち、右遠の論考は、作品集の年譜や回想に基づいて譲原の生涯を辿り直した上で、代表作を丹念に論じており、譲原昌子研究の基本的な作業を一通り提示した労作といえよう。ただ、一つ注目されるのは、これらの論考と相前後して初期の代表作「朔北の闘い」が黒川創編『満洲・内蒙古／樺太』（新宿書房、一九九六年二月）に再収録された

ことであり、黒川は、この作品の「小説としてのリアリティ」を高く評価し、前作「闘い」に見られる譲原の力量を再評価している。

しかし、幼くして樺太に渡ったといわれる譲原昌子の生い立ちには謎が多く、その生涯は現在なお不明のままである。「知られざる作家」と呼ばれるのはこの理由にもよるが、これは、譲原が、自らの出自に疑いを抱き、自己について多くを語らなかった上、この作家が青春時代を過ごした「樺太」がすでに日本の領土ではないことが最大の原因であろう。たとえば、同人誌の仲間であった木全圓壽が「無名の作家」譲原昌子の空白に満ちた生涯と作品を巻むことなく追求し、樺太出身の同窓生たちが、取り付かれたようにその作品を集めたのは、木全のいうように、「譲原昌子追跡という多難な作業」が、「一人の作家の鎮魂ということだけではなく、もはや歴史の向こうへ遠ざかってしまった樺太への深く沈んだ証言」を意味したからではないだろうか。¹⁾つまり、本来資料が少ない上、彼女を知る友人、縁故者が少なくなった今日、我々ができることは、彼らの証言に耳を傾けるとともに、史実に照らして回想や作品を丹念に読み、そこに描かれた世界から作家の原像を明るみに出すという曖昧かつ危険な方法しか残されていないのである。本論では、あえ

てこの非実証的な試みに依拠しつつ、不明な点の多い樺太時代の譲原昌子の素顔とその作品世界の一端に光りをあててみたいと思う。

一、謎の生い立ち

山野井みち編「年譜」によると、譲原昌子は一九一一年一月一日「東茨城郡沢山村大字阿波山にて父船橋捨吉母スゝの長女として生まれる」となっているが、捨吉夫婦は、一九〇五年五月、東京で結婚しており、「自筆年譜」には出生地を「北海道空知の国」と記している。このくい違いは譲原が「養女」であったかどうかという問題とも関わるが、若くして故郷を離れた捨吉が各地を転々としたことから考えると、たとえ北海道で生まれたにせよ、不安定な生活の場で出生届をするのをためらった結果、本籍地に届けを出したとそれなくもないだろう。しかし、この夫婦がどのような経緯を経て結婚し、また樺太に渡ったかは不明であり、自伝的エッセイ「母と私のこと」（一九三八年）にも「北海道で生まれると間もなく樺太へ渡って島で育った私」という記述しかない。一つ注目されるのは、半自伝的作品「朔北の鬨い」冒頭の、一家が樺太へ渡ったのは、「フユが六つ、大正六年四月であった」という記述である。この年月は、「鬨い」

にはないが、伝記的記録の断片として読むなら、全く意味をなさないわけではないだろう。一九一七年四月は、父親の捨吉が長く「営繕」を努めたという富士製紙に合併された日本化学紙料が落合で製紙工場の操業を開始した時期と一致するからである。後に、作者がこの事実を知り、それに合わせて時代を設定したともいえるが、初期の自伝的作品「父親」にある「殖民地に於ての十六年間の生活」という記述とも符合するため、伝記的事実の一つの可能性として指摘しておきたい。ただ、山野井みちが譲原の身内から聞いた話によると、「捨吉は大正四、五年には樺太に渡っていて、ずっと富士製紙で働いていた」ともいい、もしこの記憶に間違いがなければ、捨吉はしばらく他所で「造材業・大工棟梁等の仕事」をした後、日本化学紙料の操業に合わせて落合に移り住み、一九二二年、富士製紙に合併された後「営繕」の仕事についてとも考えられる。

もう一つ、譲原が捨吉夫婦の実子であったかどうかという点についても、不明な点が多い。彼女は、自分が母親と似ていなかったこと、一四歳の時に「生まれた」妹の出生に疑問を抱いたことから、自身も養女ではないかという疑いを生涯抱き続けた。高本秀子も、直接会った印象から、母親が「物腰や話しぶりから粹筋の果て」で

あったらしいこと、彼女がこの母親と似ていなかったことから「養女」ではないかという疑いをもったという。

しかし、山野井は、本籍地の身内に確認したところ、譲原が「捨吉の妻子でなかったという証言」は得られず、妹の優美子も「年をとったお姉さんは、お父さんそっくりになって来た」と語ったという。これらの証言を考え合わせると、母親はともかく、父親とは血縁関係があったことが考えられるのではないだろうか。いずれにせよ、「貰い子」の問題は譲原の作品の一つのテーマとして貫かれ、「やどかり」（一九三七年九月）、「小鳥も帰る」（一九三九年一月）等、初期の作品にも血の繋がらない家族を描いたものが多い。母親の没後は、「抒情歌」や「泉」で血縁関係のない母子や姉妹を正面から取り上げ、前者では「生みの母という女への憎しみの為に、悪魔に魂を売り渡すことさえ決して怖れぬ絶望的な気持ちにおそわれる」という実母への愛憎が表裏一体となった主人公の複雑な心情を描き出している。

また、譲原一家は、姉妹ともに高等女学校を卒業していることから想像されるように、一時は「家作二、三軒」を持ち、経済的には余裕のある生活を送っていたと思われる。しかし、母親が「抱女をおく料理屋」を営んでいたことは、姉妹に暗い陰を落としていたようである。

初期の短歌には、「老い母はかえり来まさずあきらめて泣き居し妹の眠りたるかも」という歌が見られ、ここには母親が家に帰らぬ夜の姉妹の寂しさがにじみ出ている。「闘い」には、フユがしばしば「夜晩く帰って来た」母親の素行を疑い始める心情が描かれ、「故郷の岸」には、「女給」の母親が夜家に帰らないと、寂しさのあまり家出をする少女が登場するが、これらの描写には作者の幼い頃の体験が原型としてあったのではないだろうか。両親の関係も、一九三〇年七月、離婚、その三年後に復縁するという複雑な面があり、家庭的には決して安定した状態ではなかったといえよう。

二、創作への情熱

このような複雑な環境に育った譲原昌子は、成績優秀ではあるが、無口で級友ともうち解けない孤独な少女に成長した。樺太庁立豊原高等女学校で同級となった佐久間キミの回想によると、譲原の「文章の美しくさ」、「表現力のずばぬけた巧みさ」は、教師の朗読で教室中に「小さなざわめきがおきた」ほどであり、「時おり彼女の模範答案が教室に張り出され」ていたという。佐久間はそんな彼女を尊敬しつつ交際していたが、二年生の春休みに突然、理由不明の「絶交状」が届いたため口も聞け

なくなつた。その後は笑顔の消えた表情と「孤独な後ろ姿」が印象に残つたという。女学校二年生といえ、妹優美子が「生まれた」年であり、この頃自分も養女ではないかという疑問を強めたのではないだろうか。譲原は、一九二九年三月、女学校の補習科を終了し、四月から訓導として落合第二小学校に勤務したが、このことは女学校の級友にも知らせず、当時の同僚ともほとんど口を利かなかつたという。当時のエッセイ「泣けぬ心」（一九三三年一月）や「母と私のこと」（一九三九年三月）には、日記にさえ自分の感情を表さないこと、「環境」が「感情を殺す事を教え」、それに馴れたため人間嫌いの性格になつたと述べている。一方、譲原はその淋しさから書くことに熱中した。「文学という支柱をとってしまつたら、私はばらばらに崩れてしまふぞうだ」という言葉はそのぎりぎりの心情を吐露したものであろう。しかし、彼女はこの性格ゆえに、「身辺の事情を決して作品にしない」という姿勢を貫くことにもなるのである。

たしかに、譲原昌子の作品は、自伝的作品と見なされるものもほとんど家族構成や年齢、職業、場所が微妙に脚色されており、発表の際も「船橋きよの」という本名は全く使わなかつた。樺太では、一九三一年から短歌雑誌『冷光』や総合雑誌『樺太』の文芸欄に短歌を発表し

始めていたが、その頃からほとんど「譲原昌子」という筆名を使用している。その後、「闘い」を始めとする『樺太』掲載の小説には「鷺津ゆき」という筆名を用いたが、同名の女性がいたため再び譲原名に戻したという。しかし、『樺太』の編集者山野井洋は譲原の才能を高く評価し、一九三二年当時、まだほとんど小説を書いていなかった譲原昌子を実名、写真入りで紹介している。彼女はまた彼女の「散文の天分」を見抜き、「湖北の闘い」の前身「闘い」を書くきっかけを与えたといわれるが、この作品と第一回九鬼賞受賞の「金歯」により「鷺津ゆき」の名は樺太文壇で一躍有名になつた。したがって、デビュー当時の譲原はむしろ「鷺津ゆき」の名で知られており、その素顔も同地の文学愛好家の間では周知の事実であつたのではないかと思われる。

一方、譲原昌子は中央の文壇を目指して『文芸首都』（一九三三年一月創刊）にもしばしば投稿し、詩は早くから林芙美子によって認められていた。また、小説は、『父親』（一九三三年七月）、「岩香蘭」（一九三五年一月）が宇野浩二、広津和郎の選により入選しており、この時期は、短歌、詩、エッセイ、小説とあらゆるジャンルに触手をのばしていたことがうかがえる。しかし、当初は詩に秀作が多く、「候」体で書かれた「青き海」（一

九三三年六月）は林に「此様に美しい詩を得て選者亦愉しく候」と評価された。一九三五年二月、選者になった萩原朔太郎も、譲原の「氷下魚」を「表現的にも老熟しているし、詩想もよくリリカルに旺盛して居る」と評価している。¹³⁾ただ、この詩は、「リリカル」というより、「荒い殖民地の生活に疲れ果て／殖民地で死んで行く人々の象徴^{すがた}」を極寒の大氣にふれ一瞬の中に凍り付く氷下魚に準えたものであり、ここには「闘い」に通じるモチーフと樺太の現実を見据えた譲原のまなざしが感じられる。また、譲原が朔太郎に傾倒していたことは、戦後の小説「死なない蛸」の題名によっても知られるが、「文芸首都 新人推薦詩」となった「魚」は明らかに散文詩であり、この時期からその影響が認められる。しかし、詩人としては大成することなく、「氷下魚」を以って最後とし、「闘い」発表後は専ら小説の創作に専念するようになった。

三、心に秘めた思い

譲原昌子は、一九四九年一月二日、清瀬の国立療養所で三七歳の短い生涯を閉じたが、その直前、Kという人物と恋愛関係にあったらしいことは、当時交流のあった『民情通信』同人等によって明らかにされている。し

かし、この事実はK本人によって「譲原昌子とは全く関係がない」と否定されたため、当時はその実名すら明かされなかった。¹⁴⁾これが現在知られる譲原唯一の「恋愛」であるが、彼女の作品には生涯を通じて男女の生き方をテーマにしたものが少なくない。「岩香蘭」には、密かに憧れた従兄がそれと知らずに結婚し、自分もその思いを秘めて望まぬ結婚をしたあき子という女性の心の揺らぎが描かれているが、恋愛と結婚というテーマは「山は翼」（一九三八年一月）、「菜の花」（一九三九年三月）へと書き継がれ、仕事を持つ女性のプラトニックな恋愛は「焚火」（一九四一年一月）、「童子という女」（一九四三年四月）の主人公や「故郷の岸」のヒロイン杉子の同僚教師への密かな憧れに通底している。

「菜の花」の岸子は、あき子と同様、「新しい時代の教育を受け」ながら、「周囲から薦められ」た「気乗りのしない」結婚をし、三人の子供の母親となった後も「遠い昔に密かに思い続けた人」を「反芻」して生きるような「伝統の古い女の殻を破れぬ女性の一人」である。これに対し、「山は翼」に登場する子持ちの未亡人秋子は、「恋人」の菅井から求婚されても「もっと野性的な傍若無人さがほしい」と断って別の男と結婚し、「焚火」の素子は、同僚の「山男」Kに惹かれながら、「すべて

を擲棄する」自己犠牲的な愛を拒むような「強い自我」を持つ女性として描かれている。このように、譲原は、近代的な教育を受け、心惹かれる相手もありながら望まぬ結婚をし、なおその生活に埋没することにささやかな抵抗を示す女性を描く一方、経済的に自立し、男性に依存して生きることを拒否するような強い自我を持つ女性を描いている。自らは公立小学校で長く訓導を勤め、生涯独身を通したが、結婚生活の可能性を模索した時期もあったのであろう。しかし、譲原の描く作品には、近代女性にとって結婚は不幸をもたらすという結婚観が見え、自立しているように見える独身女性も、恋愛に進めない男女関係の中で宙づりにされたままである。樺太という辺境の植民地で、両親の関係が不安定な家庭に育ち、自身の出生を疑う彼女にとって、女性の幸せはどこにもなかったのであるうか。

一方、これらの女性達が惹かれる男性も、決して平坦な人生を送っているわけではない。あき子が憧れた俊一郎は「樺太庁農事試験所の技師」をしていたが、「思想的な混乱」によって退職し、今は東海岸で「緬羊の大きな牧場」を経営している。「山は雲」の菅井も「北大の水産科」を「思想的な」理由で中退し、十和田湖近くの虹鱒の孵化場や樺太西海岸に住む伯父の燻製工場で働き、

経済不況により伯父が内地に引き上げた後は、南樺太北部の森林地帯で「水源地水道工事場」の「水道部雇員」となった。同様の経歴は、樺太山中の工事現場で葉を売り歩く「雪の道づれ」（一九三九年一月）の主人公新庄にも通じるが、これらの登場人物は、いずれも思想的に屈折した過去と不安定な職歴を持っている。また、独身女性が思いを寄せるスキー選手や山男にもどこか翳りが感じられ、遅しい体躯に孤独感を漂わせる。ここにもまた共通の特徴を持つ人物像が浮かび上がるが、作者はこれらの登場人物に自身の実らぬ恋の相手を重ねていたのかも知れない。いずれにせよ、彼らの経歴や人物造型からは、変化の多い植民地社会の一面が垣間見え、知識人の中にも複雑な過去を持つ男達が少なからずいたことが示唆されている。

最後に、短歌、詩、エッセイ、小説を貫いて譲原昌子の過去を彩る一筋の糸を手繰り寄せておこう。一九三三年八月のエッセイ「自嘲」には、蔦の葉を顔の上に乗せ、草原で微睡みながら「現在の段階から進む事も出来ず、そのくせ死ぬもしないで、豚の如くに生きて行く」自分を自嘲した文章が書かれているが、ここには「まろび寝の顔をおほえる蔦の葉の葉脈は美しく陽に透きそ美ゆ」、「美しく葉脈浮き上がる蔦の葉のすきより見ゆる空の青

「さまよ」という二首の短歌が挿入されている。これらの歌は「ほめられた歌だから忘れていない」のである。歌の詳細は定かではないが、このモチーフは、翌年七月に発表した詩「逃避術」に繋がる。詩は「おんなひとり、あお向けになって口笛を鳴らしている草原」で「白い雲」と「おんな」の対話として展開するが、女は雲に「露の葉っぱを取って顔を見せてくれないかな」と言われても「葉脈が陽にすぎ通ってとてもきれい。それにこの葉っぱの蔭で逃避術を使っているところ」といって露の葉をとらない。雲は静かに流れ去り、女は「草の匂う原っぱ」に取り残されて独語する。「ああ、雲は何故流れる。空は何故青い。／人は何故恋をする。草は何故匂う……」。雲と女の対話になっているが、これは明らかに恋の詩であろう。

このモチーフは一〇年後の作品「故郷の岸」に再び挿入される。小学校の教師である杉子はある日榎谷訓導と野外学習に出、生徒達が「林の中や草原や小川の畔に散らばって思い思いの遊びに夢中」になっている頃、「河畔の草原」で「仰向けに寝をべって」いた。この場面は、杉子の内面がまるで詩のように描写されている。「草が匂う、陽の光が眩しい、顔に露の葉を載せる。葉の所どころ虫の食った小さな穴は窓である。青空が見える、雲

母のような雲が流れる。精緻な葉脈の編み目模様は薄緑にすぎ通ってレースのように涼しい。」ここに至って、我々は初めて以前の短歌や詩がどのような情景を歌ったものかその全景を知ることができたように思われる。これは、遠い日の思い出の一場面を作品のなかに取り込んだものであるが、逆に言えば、譲原の過去の作品はこの情景の一部をモチーフにしていたともいえよう。もはや誰も知ることのない譲原昌子の若き日の思い出ではあるが、ここに榎谷訓導がいたことは印象深い。発表した時期から判断すると、詩やエッセイは、一九三三年五月、譲原が真岡第二小学校に転任後書かれたものであり、真岡では、落合での生活とは異なり、異性に心をときめかせる日々があったのかも知れない。

四、植民地を見る眼

では、譲原昌子は植民地樺太の現実をどのように見ていたのであろうか。まず、作品やエッセイを通じていえることは、明治期以来の樺太紀行や同時代の北海道文学とは異なり、アイヌ民族や他の少数民族に関する描写が非常に少ないことである。少数残留していたと言われるロシア人については、「白糸ろしやの人たち」（一九三五年一〇月）というエッセイを書いているが、アイヌ民族

については、「朔北の闘い」等に内淵河畔に住むアイヌへの言及がある外、「体臭」や「小刀^{マナリ}」を比喩的に使った表現があるだけである。他の少数民族については、心理学の本で「移住本能」について読み、「今でも幌内河畔に漂泊の天幕生活を続けているというギリヤーク、オロッコなどは、この移住本能を太古から少しも抑圧せず^⑬に持ち続けて来たのであろう」（「蟹、鯨、移住本能」一九三九年五月）と述べているが、この種の異民族観は、当時一般に流布していた皮相的な文学表現や概説書の言説をほぼそのまま受容したものであり、少数民族の居住地として知られる樺太に暮らしながら、あたかも彼らの存在が視野に入っていないように見える。

しかし、日本の樺太統治の歴史を見ると、これも無理からぬことであった。サハリン島は、本来ニブフ（別名ギリヤーク）、アイヌ、ウイльта（オロッコ）、エベンキ（ツングース）、サハ（ヤクト）と呼ばれる先住民族が自由に行き来する島であり、近世以来日本人、ロシア人が彼らの毛皮や海産物を求めて往来するようになった後も、異民族混住の地として容認されていた^⑭。しかし、一八七五年以降の帝政ロシア領時代は、「悪魔の島」と呼ばれる流刑地として多数の囚人が送り込まれ、少数民族はロシア人の支配下におかれるようになった^⑮。一方、一

九〇五年、北緯五〇度以南が日本の植民地になると、少数民族はすべて「土人」という呼称の下に居住地を指定されて厳しい同化政策が取られるようになり、一九三三年、同化の進んだアイヌ民族に戸籍を認めただ後は、他の少数民族は「アイヌ以外の土人」として半ば強制的に敷香郊外のオタスにまとめられた^⑯。同地は「オタスの杜」と呼ばれる観光名所となり、樺太を一時的に訪れる日本人にはよく知られるようになったが、現地で生活に追われる人々の目にふれる機会はいささか少なくなったのではないだろうか^⑰。また、日本の戸籍を取得して各地に散住していたアイヌも、「日本人」には禁じた鮭や鱒の漁が許可されるなど、依然として「保護」下に置かれていた。このため、樺太在住の日本人移住者が彼らを社会的同胞として認識する意識は低かったのではないかと思われる。

一方、植民地として見れば、樺太は政治的実権を持つ「現地人」のいない「処女的植民地」として発足したため「格別の困難」もなく支配が進み、先住民族に対する日本人の人口比率が「圧倒的」に増加していった^⑱。一九三三年の樺太紹介書にも、南樺太の全人口中、日本人が二八万四三四五人で、「九割以上は内地人」であることが記されている^⑲。このような植民地社会で、讓原が日常

目にしたものは、ほとんどが「ジャッコ鹿」と呼ばれる「仙夫」、「蛸人夫」、「鯁漬し」等、各地を転々とする日本人労働者や入植に失敗してその日暮らしに追われる人々だったのではないだろうか。彼女が「闘い」等の作品で取り上げたのは、まさにこのような人々であった。しかし、ここで注目されるのは、一九三三年当時、樺太には「外地人」として朝鮮人が八一八一人居住しており、その人口がアイヌ民族（二一七一人）と他少数民族（四七一人）の合計を遙かに上回っていたことである。譲原はアイヌや少数民族を作品の題材とすることはなかったが、朝鮮人についてはしばしば言及している。「山は雲」には、宿宮バラックで起こった労働者の「大乱闘」で帳場と現場監督が「多数の朝鮮人土工」に「袋叩き」にある事件を描いており、「雪の道づれ」には、逆に、山中で道に迷った新庄が「半島人」のグループ助けられる場面がある。しかも、この中の「内地語の達者な目付きの鋭い背の高い男」は、彼が「水産投手」をしていた頃の友人に「そっくりの顔付き」であったという。しかし、これらの作品を発表した当時、譲原はなぜか学級にもいたはずの朝鮮人児童については一切言及せず、教師を辞め、上京後に発表した「故郷の岸」でもまだ彼らについての具体的な描写はない。

日本人の小学校にいた朝鮮人児童とその家族を取り上げ、彼らの苦悩と抵抗の姿を描いたのは、死の直前になってからであり、その代表的作品「朝鮮ヤキ」（一九四九年四月）は遺稿として発表された。この作品は「太平洋戦争のはじまる三年ほど前」の真岡と思しき「樺太西海岸にある炭坑町」が舞台となっており、そこで教師をしている「私」の経験談として語られる。「私」のクラスは「李竜孫」は、全校の朝鮮人の中でも目立って話の上手な「伶俐で、明るく人なつこい性格」の生徒であったが、家を訪ねようとする性格が変わったように無口になり、家族に会わせようとしてもしない。ようやく会えた姉は「綺麗な顔立ち」の「教養ある娘」で、とても「選炭婦」には見えなかった。帰り道、炭坑の医者で校医の「岩佐医師」に出会い、どこことなく竜孫の姉に似ていると思ったが、気にも止めなかった。日華事変後、炭坑労働者が払底し、「最低の賃金でよく働く、朝鮮人労働者」がしばしば「玉抜き」（引き抜き）にあっていたが、ある日逃亡した朝鮮人労働者八人中四人が捕まって「朝鮮ヤキ」（厳しい拷問）にあい、一人が重体になると、朝鮮人労働者が「同盟罷業」を行い、「武装した労務係」の突入によって「流血の惨事」が起きた。これを知った朝鮮人部落は動揺し「ただならぬ形勢」になったが、

「大がかりな武装警官が出動して」その暴動は鎮圧された。そのうち李の一家が姿を消し、「岩佐医師」が検挙されるが、この時初めて彼が「李元春」という朝鮮人で李の兄であったという事実が明らかになる。「私」はこの事件をきっかけに「愛だの正義だの人道だの」というきらびやかなものが、鎖につながれた者の意識を一そうしびれさせる麻薬入りの砂糖菓子であったこと」を知ると共に、「教員生活がつくづく嫌になった」という。ここには、多数の朝鮮人労働者を低賃金で酷使する植民地権太の暗い一面が女教師の目を通して描き出され、それが教職を疑問視する姿勢へと繋がった経緯が示唆されている。

もう一つ、取り上げておきたいのは生前辛うじて発表された「つんどらの碑」（一九四八年五月）である。この作品は、「御真影」を守るために焼死した父を持つ波岡敏彦の波瀾に富んだ人生を描いたものであるが、ここにも朝鮮人が登場する。波岡は、父を殉死に追いやった国家を怨み、反抗的態度を取ったため「植民地特有の軍事警察」に睨まれ、優秀な成績を惜しまれながら卒業を目前に中学校を放校された。その後母が死ぬと、彼の生活は荒み、喧嘩沙汰で逮捕されたところを、朝鮮人を父に持つ友人宮井信一に助けられる。一年後、波岡が東海

岸の練場で奮背負いをしていた時、宮井が「不逞鮮人の一味と、朝鮮独立の陰謀を企」てたとの理由で特高に検挙された。彼が波岡の手紙を持参していたため、波岡も取調べを受けたが、証拠不十分のため釈放される。しかし、彼は「国境守備隊」に入営中、反抗的な態度をとったため、上等兵から「制裁」を受け、拷問の最中命を落とすのである。この作品は、ある意味では、「朝鮮ヤキ」以上に、学校制度の中枢に浸みこんだ「儒教的倫理想」や「ファシズム」の横暴に対する憎悪が漲っている。波岡は、父の死は単なる「偶然」ではなく巧妙に仕組まれた「運命」と見抜き、「献身、犠牲と呼ばれる美德」の「陰に隠された」「秘密の屍臭」を「高められた理性に依って発きたい」と願うようになるが、この思想は、「残忍な得体の知れぬ鋼鉄の蜘蛛手」によって「がんじ絡め」にされた同胞を解放したいと願う朝鮮人活動家の思想に通じるものがある。また、ここで登場する「李英鍋という炭坑の医者」は、「不逞鮮人」として警察に追われる宮井の友人であるが、前作の「朝鮮ヤキ」に登場する岩佐医師と共通の側面を持ち、作者の心に印象深く影を落とした朝鮮人の一人がモデルである可能性も高い。

これらの作品に描かれた事件を歴史的に証明することは難しいが、当時樺太には日本から渡った者以外に、炭

抗労働者として拉致同様に樺太に送り込まれた朝鮮人が多数存在したといわれる²¹⁾。内地で教育を受けた子弟の中には李元春（岩佐医師）や宮井信一のような日本人になりすました活動家も少なからずいたのではないだろうか。また、波岡敏彦は日本人であるが、以前の作品にしばしば登場した複雑な過去を持つ人物に断片的にせよ通じる側面がある。これらの作品は、讓原昌子が日本共産党入党（一九四八年六月八日）後に書かれたものであり、表現方法にはその思想性が認められるが、そのことを差し引いても、讓原が樺太において強い印象を受け、長年胸に秘め続けた事件や人物をモチーフにしている可能性が高いように思われる。

おわりに

讓原昌子の戦時下の作品には、岡崎元哉のいうように、思想的な「まよい」があることは確かである²²⁾。「故郷の岸」の女教師天満杉子は、子どもたちに「こんな有りがたいお国に生まれた日本の子供は何というしあわせな事でしょう」とためらいもなく語り、一見プロレタリア文学のように見える「働蜂」の主人公西川津香子は、戦時下の困難を「祖国が新しい世界を生みだす」ための「生みの苦しみ」と捉え、「国家の大理想貫徹」に共感する

姿勢を持っている。また、『北方日本』に発表されたエッセイ「郷愁」（一九四三年二月）には、「北進日本の拠点となるべき樺太」の建設を説く一方、「聖戦」が終わり「八紘一宇の大理想が貫かれた暁には」同じ容貌を持つアジア諸国の子供たちと「理解と親愛の言葉」で語り合えるという大東亜共栄圏の思想が垣間見える。この姿勢がピークに達するのは、一九四四年『新作家』終刊号に発表された「母の夢」であり、この作品には「皇国の生命の悠久と俱に、人間の夢である芸術そのものは滅びはしない」という舞踏教師の言葉に共感しつつ、父の遺志を継ぐためバレーに打ち込んで来た一人息子を戦地に送り出す母親の悲壮な心情が描かれている。

戦時下のこのような姿勢は、讓原昌子に限ったことではなかったが、上京以前に発表した「朔北の闘い」等の作風と比較しても、思想的に後退があるように見える。しかし、これは、苛酷な自然の中でひたすら生きる樺太の民衆に対するナイーブなまなざしを持つ作家が、首都東京の時代の波を剥き出しにしたような現実の中で生活に追われ「死なない蛸」のように追いつめられた時、その現実には抵抗するすべもなく足元を掬われた姿ともいえるだろう。この時期の、時局におもねるような言葉や表現は、したがって、思想的な混迷というより、生活のた

めに作品を切り売りしなければならぬ者のぎりぎりの選んだったような気がしてならない。それだからこそ、終戦後、無謀な戦争遂行を根底で支えた国民の意識を縦横に操った日本の政治体制に憎悪を抱く人物を描き、その忠君愛国的な道徳教育の裏側に潜む残酷性を暴いた「つんどらの碑」および「朝鮮ヤキ」を遺すことができたのである。讓原昌子という「無名の作家」が、人々を引きつけ、彼らを作品の掘り起こし作業に駆り立てたのは、まさにこれらの作品のもつエネルギーであると言っても過言ではないだろう。ここには、樺太の厳しくも美しい北方の自然とともに、暗くおぞましい植民地としての過去も描き込まれているが、それはもはや誰も戻ることのない幻の「故郷」樺太のもう一つの姿であった。

注

- (1) 木全圓壽「女流作家碑名」、『北斗』一九七九年一〇月、同「讓原昌子を追跡した人びと」、『故郷の岸』、前掲書。
 (2) 山野井みち編「讓原昌子年譜・作品一覧」、『故郷の岸』同成社、一九八五年三月、同「年譜追記」、『闘い・女の宿』同成社、一九八八年二月。「自筆年譜」は、岡崎元哉「赤い鶴の一生―讓原昌子さんの思い出―」、『故郷

の岸』、参照。

- (3) 四宮俊之『近代日本製紙業の競争と協調―王子製紙、富士製紙、樺太工業の成長とカルテル活動の変遷―』日本経済評論社、一九九七年二月。なお、落合の製紙工場については、拙論「讓原昌子『朔北の闘い』考―樺太と生い立ちの「記録」―」、『社会文学』第一五号、二〇〇一年六月、注(6)も併せて参照された。
 (4) 山野井みち「讓原さんと私との因縁」、『闘い・女の宿』、前掲書。
 (5) 山野井みちの証言によると、妹の優美子は全く血縁関係のない養女であったという。二〇〇一年二月二十八日付筆者宛書簡。
 (6) 高本秀子『故郷の岸』が出るまで、『朔北の闘い』同成社、一九八五年一月。高本は豊原高等女学校で五年間同級であった。
 (7) 注(4)に同じ。
 (8) 佐久間キミ「船橋きよのさんと私」、『朔北の闘い』、前掲書。
 (9) 高本秀子「きよのこと」、『故郷の岸』、前掲書。
 (10) 山野井みち編「讓原昌子年譜・作品一覧」、前掲。なお、黒川創編「満州・内蒙古／樺太」所収「樺太の「日本語」文学関連年表」の「青き海」「父親」「白糸ろしやの人た

ち」「朔北の闘い」の筆名は「船橋きよの」ではなく、
ずれも「譲原昌子」であり、「雪の道づれ」の「鷺津ゆ
き」は「譲原昌子」のあやまりである。筆名に関しては、
ゆまに書房刊「日本植民地文学精選集」第二期、筆者編
『譲原昌子作品集』（初出復刻、近刊）を参照されたい。

(11) 「樺太の女流作家とその作品」、『樺太』一九三二年四月
号。

(12) 荒沢勝太郎『樺太文学史』第四卷、艸人舎、一九八七年
七月。

(13) 『文芸首都』一九三六年四月号。

(14) 岡崎元哉「赤い鶴の一生―譲原昌子さんの思い出―」、
前掲、および久鬼高治「鶴は故郷の空へ翔んだか―譲原
昌子について―」、『闘い・女の宿』にはこの恋愛が言
及されているが、どちらもKの本名は明かしていない。
なお、久鬼の証言によると、Kは、金親清であり、当時
彼には妻子がいたため本名をあえて伏せたのだという。
(15) 北海道立北方民族博物館編『樺太』905-45、日本領時代の
少数民族 第一二回特別展』、一九九七年七月。

(16) チェーホフ著『サハリン島』上、下巻、岩波書店、一九
六〇年九月。

(17) 注(15)に同じ。

(18) 林芙美子「樺太への旅」(一九三四年)、高橋新吉「樺太

紀行」(一九四〇年)、『世界紀行文学全集』第一三巻、
樺太・朝鮮・台湾・南洋編、一九六〇年九月。

(19) 『日本統治下の樺太』(『外地法制誌』第7部)、条約局法
規課、一九六九年一月。

(20) 福家勇『樺太とはどんな処か』樺太日日新聞代理部、一
九三三年五月。

(21) 創価学会婦人平和委員会編『フレップの島遠く』、「平和
への願いをこめて」第一一巻、樺太・千島引揚げ(北海
道)編、第三文明社、一九八四年八月。

(22) 岡崎元哉「赤い鶴の一生―譲原昌子さんの思い出―」、
前掲。

付記 作品からの引用は、すべて現行の作品集『故郷の
岸』、『朔北の闘い』、『闘い・女の宿』による。なお、文
中の「樺太」、「落合」(現ドーリンスク)、「真岡」(現ホ
ルムスク)という地名は現在使用されないが、本論の性
格上、日本統治時代南サハリンの呼称としてそのまま使
用した。

(名古屋大学大学院博士課程後期)